

ふるさと御所 文化財探訪

文化財課

☎60-1608

(4月下旬から上記電話番号に変更しました。)

其の三十二

古墳時代 ②〇

葛城氏の盛衰 ⑨

葛城氏と

河内政権②



図1 古市古墳群全景
(写真提供: 藤井寺市教育委員会)

もちろん地方の伝統勢力に対する牽制策は、中小規模墳の首長に対してばかりではなく、大形前方後円墳に葬られた大首長にも及んでいます。とりわけ、福岡県の老司古墳や鋤

崎古墳の場合には、前期から中期への転換期に相当したためか、それぞれの古墳の中心的な被葬者自身も中期型甲冑の所有に消極的であったことが判り、大変興味深く思われます。老司古墳の中心主体である3号石室からは朝鮮半島製と見られる特殊な構造の籠手や草摺と脇当のほか衝角付冑の頂部に付くべき三尾鉄が単体で出土していますが、甲冑出土古墳として本来見られるべき短甲は、副次的な埋葬施設である2号石室に副葬されていました(図2)。また、鋤崎古墳の場合には、短甲は古墳築造の契機となった初葬の人物に伴ったわけではなく、追葬棺に伴う遺物でした(図3)。そして右記の2墳では、冑ばかりか頸甲も伴わず、これは先月号で述べた中小規模墳のいずれの甲冑保有形態に対してさえも

劣るものと評価できます。このことから、未だ十分には「ましろわぬ者」に対して、中期の政権は甲冑をセットでは与えず、一方で、かれら前期以来の在地首長も中期型甲冑に重きを置かないといった、双方の根底にある対立した意識が見えてきます。改めて述べます。中期の政権が、前期のそれと同じ系統の上に成り立っていたとするならば、その地方経営は、老司古墳や鋤崎古墳といった前期以来の在地の大首長や、先月号の図3に掲げた中小の首長のうち、伝統勢力の方を軸に展開させる方が自然かつ合理的です。ところが事実とは異なり、中期の政権はむしろ、新興の、しかも中小の首長の方をより篤く待遇しているのです。これら一見矛盾するかにみえる事

例は、中期の政権が、地方において新たな勢力を興し、甲冑の配布などを通じてむしろそれらを篤く待遇することにより、旧来の伝統的な在地首長層を牽制し、ひいては、彼らをも自らの勢力下に収めようとする政策の顕現したもの、と評価できます。地方経営に際しての、この前期とは整合性の認められない政策の存在は、前期以来の政権がそのまま中期に入っても継続して地方に対応したとするには明らかな矛盾ということが出来ます。そして、これは前期と中期の政権の間には連続性が無く、系統の違いがあること、すなわち河内政権の存在を肯定するべき明確な証拠であると思っています。

【参考文献】拙著『古墳時代の王権と軍事』、2006年、学生社

(文責 藤田和尊)

(次号に続く)

図2 老司古墳の埋葬施設と甲冑の副葬位置
(報告書から、一部改変)

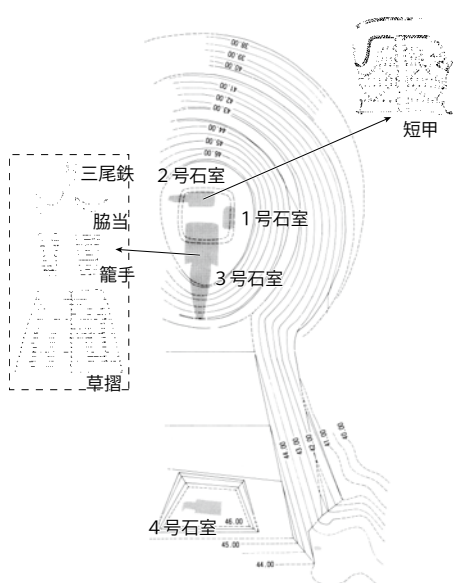


図3 鋤崎古墳の石室内棺配置と甲冑の副葬位置
(報告書から、一部改変)

